The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	太宰治「葉桜と魔笛」論 : 反転する〈美談〉／姉妹のエクリチュール
Author(s)	川那邊, 依奈
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2014, 48, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

太宰治「葉桜と魔笛」論

――反転する〈美談〉／姉妹のエクリチュール――

川那邊　依奈

キーワード：太宰治／葉桜と魔笛／美談／手紙／エクリチュール

一、先行研究と問題の所在

「葉桜と魔笛」は、一九三九年六月発行の『若草』（寶文館）第一五巻第六号の小説欄に発表され、後に、『皮膚と心』（一九四〇年四月、竹村書房）に収録、創作集『女性』（一九四二年六月、博文館）に再録された作品である。

梗概としては、ある老夫人によって、三五年前の出来事が語られる。当時二〇歳だった「私」（＝現在の老夫人）は、中学校長の父と、一八歳の妹と暮らしていたが、妹が腎臓結核に冒され、余命百日以内と宣告される。そうしたある日、「私」は、妹に届いた三〇通ほどの恋文を発見し、妹が病のために恋人から別れを告げられたことを知る。不憫に思った「私」は、妹の恋人を装って、変わらぬ愛の証明として、夕方六時に塀の外から「軍艦マアチ」の口笛を吹くことを約束した手紙を書く。しかし、実は恋文は妹が淋しさを紛らすために自分宛てに書いていたことが明か

される。妹は、姉も自分も厳格な父のもとで「お悧巧すぎた」ために青春を謳歌できなかったことを悔い、姉妹は同じ無念さを共有して抱き合う。その時、手紙で約束した通りに口笛が聞こえ、三日後、妹は静かに亡くなる。「私」は、口笛を「神さまのお恵み」と信じていたが、年をとり信仰が薄れてきたためか、隣室にいた父の仕業ではなかったかと疑いを持つようになったことを告白し、作品は閉じられる。

このように、本作品は、老夫人の回想の語りによって構成され、その回想の中心は妹であると言える。井原あや氏は[1]、「結核によって夭折する美少女」という妹のイメージと、日露戦争を示すコードが接続して語られることで、妹が、徳富蘆花『不如帰』（『国民新聞』一八九八年一一月二九日～一八九九年五月二四日）の系譜に連なる〈結核〉のヒロインとして造型されたのではないか、と述べている。他方で、姉である「私」の語りも重要なものであり、「姉は妹を回想することによって、妹同様に、「恋愛」も「青春」も知らぬまま通り過ぎた自身の若き日を「いま」ロマンの中に再構成しているのだ。」という井原氏の指摘は示唆に富む。

老夫人の語りは、妹を美化するだけでなく、自分自身についても〈妹思いの姉〉という自画像を形成している。そこからは、三五年前の出来事を〈美談〉へと昇華させようという語り手の意図が読み取れる。だが、「私」の語りを仔細に検討すると、その端々には〈美談〉からの逸脱も散見され、物語の細部には、〈美談〉への志向と、そこに収斂しきれないものとが混在していることが分かる。

また、老夫人の語る物語は、姉妹が執筆した手紙を軸に展開しており、本作品において手紙というエクリチュールは無視できない。妹が書いた手紙について、木村小夜氏は[2]、「少女の感傷が書かせていたもの」であり、「自分の虚構の恋を現実のものとして残したいという願望」の表れと捉えている。また、櫻田俊子氏は[3]、「妹が書くことによって叶わない自身の欲望を昇華していた」という意味で、「手紙の創作は、自己充足の意味合いが強い。」と述べている。

他方で、花崎育代氏[4]は、妹の手紙を、姉に読まれることを想定して書かれたものと捉え、姉を翻弄する「邪悪」とも言える妹の一面と共に、姉が男性を装って恋文を書いてくれることへの期待を読み取っている。このように、妹の手紙については、すでに多様な読みがなされている。しかし、姉である「私」が男性を装って書いた手紙は、全文が引用されており、作品全体の構成上、大きな比重を持つものであるにも関わらず、これまで十分に論じられてこなかった。

本論では、「私」の語りが〈美談〉を構築する一方で、そこから逸脱していく様相を明らかにすると共に、そうして紡がれた物語の中で、手紙という姉妹のエクリチュールがどのように機能しているか、考察を試みたい。

二、〈美談〉の成立と揺らぎ

「桜が散つて、このやうに葉桜のころになれば、私は、きつと思ひ出します。――と、その老夫人は物語る。」という叙述から、一篇は始まっている。以下、「葉桜」を回想の契機として、三五年前の妹の死をめぐる出来事が、老夫人によって語られる。当時の自らの境遇について、語り手は、次のように振り返っている。

私が結婚致しましたのは、松江に来てからのことで、二十四の秋でございますから、当時としてはずゐぶん遅い結婚でございました。早くから母に死なれ、父は頑固一徹の学者気質で、世俗のことには、とんと、うとく、私がゐなくなれば、一家の切りまはしが、まるで駄目になることが、わかつてゐましたので、私も、それまでにいくらも話があつたのでございますが、家を捨ててまで、よそへお嫁に行く気が起らなかつたのでございます。せ

めて、妹さへ丈夫でございましたならば、私も、少し気楽だつたのですけれども、妹は、私に似ないで、たいへん美しく、髪も長く、とてもよくできる、可愛い子でございましたが、からだが弱く、その城下まちへ赴任して、二年目の春、私二十、妹十八で、妹は、死にました。

早くに母を亡くした「私」は、世事に疎い父と、病弱な妹を気遣って、お嫁に行かずに一家を支えていた。「妹は、私に似ないで、たいへん美し」かったという「私」の言葉が、単なる謙遜であったとしても、傍線部の述懐からは、母代りの姉として、同時に一人の若い女性として、「私」が妹に対して抱いていた複雑な思いが垣間見える。妹が、自分に代わって父を支えてくれる存在であれば、「私」も安心して嫁ぐことができたものの、実際は、美人だが体の弱い妹の世話も、自分が引き受けなくてはならなかった。

そのような、普段は抑えていた「私」の感情は、「M・T」という男性から妹に届いた手紙を発見し、無断で読んでしまう場面において、表出している。

私も、まだそのころは二十になつたばかりで、若い女としての口には言へぬ苦しみも、いろいろあつたのでございます。三十通あまりの、その手紙を、まるで谷川が流れ走るやうな感じで、ぐんぐん読んでいつて、去年の秋の、最後の一通の手紙を、読みかけて、思はず立ちあがつてしまひました。雷電に打たれたときの気持つて、あんなものかも知れませぬ。のけぞるほどに、ぎよつと致しました。妹たちの恋愛は、心だけのものではなかつたのです。もつと醜くすすんでゐたのでございます。私は、手紙を焼きました。一通のこらず焼きました。

「厳格な父」と妹の世話に明け暮れる日々のなか、「私」は、「若い女としての口には言へぬ苦しみ」、すなわち恋愛や性的なものに対する憧れや欲求を抱えていた。それゆえ、妹に届いた恋文を読むうちに、「私」は、自分自身にも「広い大きな世界」が開けてきたかのような解放感を味わう。しかし、妹たちの恋愛が「心だけのもの」ではなかった、つまり、身体的、性的な関係にまで到っていたことを知って衝撃を受けた「私」は、手紙をすべて燃やしてしまう。

「私」が手紙を焼いたのは、妹が恋人に「捨て」られたことを知り、「私さへ黙つて一生ひとに語らなければ、妹は、きれいな少女のまま死んでゆける」と考えたためだという。そこには、妹が結核であることを知って一方的に別れを告げた、「卑怯」で「残酷」な「M・T」への怒りや、そうした不実な男性と妹が交際していた事実そのものを消し去りたいという思いもあったことが推察される。妹が、清純無垢の「きれいな少女」ではなかったことを知って激しく動揺した「私」による、衝動的な行動という側面もあるのだ。

実際に、妹の秘密を知った後、「私」が、性的なものにまつわる「奇怪な空想」に苦しめられたことが明かされ、語り手は、「あのころは、私自身も、ほんとに、少し、をかしかつたのでございます。」と、当時の自分が、平常の状態ではなかったことに言及している。余命わずかな妹にとっては、かけがえのない「青春」の記録とも言える手紙を、無断で「一通のこらず」燃やしてしまったことは、いささか思慮を欠いた行動でもある。妹が、手紙を処分することなく、ひそかに保管していたことから考えても、「私」のしたことは、独善的[5]な印象が拭えない。

ここから、「私」の行動は、妹の悲恋を永久に闇に葬り、「きれいな少女」として死なせてやりたいという思いのみによってなされた訳ではなかった可能性が浮上する。すなわち、自分に隠れて恋人を得て、「青春」を謳歌していた妹に対する、嫉妬や憤りといった感情や、そこから生じた、ひそかな悪意を読み取ることも可能である。

そのように考えると、後に、妹を励ますために偽の恋文を書いたことを、妹に看破された際の「私」の反応も、再考の余地がある。

私は、あまりの恥づかしさに、その手紙、千々に引き裂いて、自分の髪をくしやくしや引き毟つてしまひたく思ひました。ゐても立つてもをられぬ、とはあんな思ひを指して言ふのでせう。私が書いたのだ。（中略）恥かしかつた。下手な歌みたいなものまで書いて、恥づかしゆうございました。身も世も、あらぬ思ひで、私は、すぐには返事も、できませんでした。

「私」を襲った激しい羞恥は、無断で妹宛ての手紙を読んで「心だけのもの」ではない恋の顛末を知ったこと、さらには、煩悶のあまり、恋を知らない自分が偽の恋文まで書いてしまったことに起因する。とりわけ、自らが書いた手紙を「千々に引き裂いて」、「自分の髪をくしやくしや引き毟つてしまひたく思ひました」という箇所からは、手紙の内容そのものも、「私」の「恥」の意識に関わっていると考えられる。

しかし、仮に「私」が、妹を救いたい一心で手紙を書いたのだとすれば、ここまで激しく取り乱す必要はないように思われる。確かに、「私」のしたことは、妹を欺くだけでなく、虚構を用いて妹たちの恋愛に介入することでもあり、「私」が、拭い難い罪悪感を抱いていたとしても不思議ではない。だが、妹は、姉が自分のために「狂言」をしてくれたことを理解して、「ありがたう、姉さん、これ、姉さんが書いたのね。」と感謝の言葉を伝えている。にも関わらず、「私」が猛烈な羞恥に苛まれた背景には、「M・T」からの手紙を読んで「私」が抱いた、妹への複雑な思いまでも、「とてもよくできる」聡明な妹に見透かされてしまったのではないか、という潜在的な恐れがあったと考え

られる。

このように、「私」の「若い女」としての一面が仄めかされていることで、「私」の様々な行動の裏側には、妹に対する屈折した感情を窺い知ることができる。「私」の、姉という側面のみに焦点を当てると、「M・T」を装った「私」が手紙に綴った、病で苦しむ妹を「どうしてあげることもできない」という「つらさ」や「無力」感は、「私」自身の思いを投影したものであり、妹のために、毎日、和歌を詠んで手紙を送り、夕方六時に「軍艦マアチ」の口笛を吹くという「M・T」の「奉仕」とは、まさに「私」自身の「奉仕」を意味している。しかし、「若い女」としての「私」の相貌を視野に入れると、妹に対する「私」の「奉仕」の純粋さに、疑問が呈されることになりかねない。

それでも、語り手が、「若い女」としての当時の内面を吐露していることによって、母代りの姉として、一人の若い女性として、葛藤を抱きながらも、妹を愛し、「奉仕」する〈妹思いの姉〉という自画像が形成されている。

自らを〈妹思いの姉〉として語ろうとする「老夫人」の意図は、妹の死期が迫るなか、「総身を縫針で突き刺されるやうに苦しく、私は、気が狂ふやうになつてしまひます。」という箇所や、妹が「M・T」に「捨て」られたことを知って「ただもう妹のことで一ぱいで、半気違ひの有様だつた」という箇所からも看取できる。これらは、自分がいかに献身的に妹を愛していたかを強調する、誇張された表現であると言えるが、その過剰さは、〈妹思いの姉〉という範疇からも逸脱していると言わざるを得ない。

さらに、井原氏[6]も指摘しているように、末期の腎臓結核であった妹の具体的な病状が、ほとんど語られていない点も注目に値する。妹は、「痩せ衰へて、ちから無く、自分でも、うすうす、もうそんなに永くないことを知つて来てゐる様子」であったが、「白く美しく笑つて」、自分のために偽の恋文を書いてくれた姉に「澄んだ声」で感謝を伝えた。そして、「不思議に落ちついて、崇高なくらゐに美しく微笑」し、三〇通にも及ぶ手紙の真相を告白したとい

う。このように、「私」は、妹の病状を詳らかにすることは避け、むしろ、病を得てもなお、美しい印象を残して亡くなった存在として妹を語っている。こうした箇所は、妹に対する語り手の愛情や思いやりを示す一方で、不自然なまでに妹が美化されている感も否めない。

物語の最後に、今となっては、口笛が、娘たちを不憫に思った父の「一世一代の狂言」ではなかったかと疑うこともある、と現在の「私」が告白している箇所では、若くして亡くなった妹と、「老夫人」となった自らとの対比が鮮明になっている。

いまは、――年とつて、もろもろの物欲が出て来て、お恥かしゆうございます。信仰とやらも少し薄らいでまゐつたのでございませうか、あの口笛も、ひよつとしたら、父の仕業ではなかつたらうかと、なんだかそんな疑ひを持つこともございます。（中略）父が在世中なれば、問ひただすこともできるのですが、父がなくなつて、もう、かれこれ十五年にもなりますものね。いや、やつぱり神さまのお恵みでございませう。

私は、さう信じて安心してをりたいのでございますけれども、どうも、年とつて来ると、物欲が起り、信仰も薄らいでまゐつて、いけないと存じます。

父がすでに他界している以上、真相は分からずじまいであり、語り手は、「いや、やつぱり神さまのお恵みでございませう。」と、疑いをいったんは打ち消すものの、「神さまは、在る。きつと、ゐる。」と純粋に信じていたかつての自分には戻れないことを明かし、物語を閉じている。長く世俗で生きるうちに、純粋さを失った者として自らを卑下する「私」の言葉は、純粋なままこの世を去った存在として、妹をいっそう美化することに繋がっている。

そして、口笛が父の「狂言」であった可能性に思い当たっても、やはり、「神さまのお恵み」と信じていたい、という「私」の言葉は、自分が構築した、いわば姉妹愛の物語が、家族愛の物語へと広がる可能性を提示しながらも、「父の仕業」であったことを積極的には肯定していない。そこから、妹が「神さま」によって苦しみから救済され、安らかな死を迎えたことを願う「私」の思いが読み取れる。その意味では、老夫人の語りは、三五年前から現在に至るまで、〈妹思いの姉〉という一貫した自画像を形成しようとしている。だが、先に確認したように、その過剰な語りは、結果的には〈美談〉からも逸脱するものとなっている。

また、夭折した妹を美化する一方で、語り手は、妹が秘めていた「若い女」としての生々しい姿を露呈してしまっている。「ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。」と恥じていた妹が、それを姉以外の人間に知られることを望んでいたとは到底考えられない。

さらに、本論では詳しく検討する余裕は持たないものの、一家は町はずれのお寺の離れ座敷という寂れた場所に暮らしており、「私」が外出先で「不吉な地獄の太鼓」のような「軍艦の大砲の音」を耳にし、帰宅後、「軍艦マアチ」の口笛が何者かによって吹かれる、という物語の展開からすると、「軍艦の大砲の音」と「軍艦マアチ」を、妹の死を予兆する不吉な連鎖として捉えることもできる。その意味では、老夫人の語る一連の出来事は、場合によっては怪異譚にも転じかねない要素を持つものである。

このように、「葉桜と魔笛」は、過去を回想して「物語」を紡ぐという人間の営為に焦点を当てた作品とも言えるが、「私」の語りによって構築された〈美談〉は、その枠組みに収まりきらない多義性や、〈美談〉を内部から崩壊させかねない揺らぎをも内包するものである。次章では、そうした問題を踏まえた上で、姉妹が書いた手紙について、検討を加えたい。

三、姉妹の手紙―反転するエクリチュール

本作品における物語全体の構造として、異性から届いた手紙が姉に発見されることが事件の発端となっている点や、姉による手紙の代筆というモチーフ等に、先行作品との類縁性が看取されることが、近年、木村小夜氏[7]によって指摘されている。本論では、「葉桜と魔笛」における手紙が、実際は、男性からのものではなく、いずれも姉妹によって創作された虚構であった点に着目して、考察を深めたい。

妹が書いた「およそ三十通ほど」の手紙は、「私」によって焼かれたために、いわば、テクスト表面には開示されない、焼失したエクリチュールである。その内容は、「その城下まちに住む、まづしい歌人」との恋を、彼から届いた手紙という体裁で綴ったものである。また、「私」が「M・Tの筆跡を真似て」手紙を書いたことから、妹が、男性の筆跡を装って手紙を書いていたことが分かる。よって、実質はフィクションでありながら、体裁はあくまでも、男性からの恋文という現実のドキュメントを装って執筆されたもので、その意味では、約三〇通の手紙で構成された書簡体小説として捉えることも可能である。

妹は、それらの手紙を、ただ執筆するだけでなく、自分の友人からの手紙に偽装した上で投函し、自らの手で受け取っていた。そして、手紙を開封し、実際は自分が書いた手紙を、恋人からのものとして読むことで、「淋し」さを慰めていたと考えられる。つまり、妹は、虚構のロマンスの作者であると同時に、それを自分ひとりで受容する、読者でもあった。

そうしたロマンスは、姉である「私」にも読まれることになる。そこに描かれていた恋愛は、それを現実のものと

して受け取った「私」までが「なんだか楽しく浮き浮きして来て、ときどきは、あまりの他愛なさに、ひとりでくすくす笑つてしまつ」たほどに無邪気なものであった。しかし、「ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。」という、妹の激しい自己嫌悪からすると、一見他愛ない恋文の奥底には、彼女の「若い女」としての、恋愛や性的なものに対する希求が秘められていたことが窺える。そして、「去年の秋」の最後の一通は、まさに、そういった妹の欲求が発露したものであった。

最後の一通において、妹が恋人との「心だけのもの」ではない関係を仄めかした理由について、木村氏[8]は、「病気の自分に本当の恋はついに訪れない」という現実を受け容れることを決意した妹が、現実への回帰と引き換えに、「あたしのからだを、しつかり抱いてもらひたかつた」という願望を虚構のなかで成就させたのではないか、とする見方を示している。

木村氏の見解は、首肯されるものであるが、さらにいえば、虚構における妹たちの恋愛が「心だけのもの」ではなくなった、つまり、身体的、性的な関係が結ばれた時点で、妹の物語は、必然的に破綻するしかなかったのではないか。

妹が抱えていた「若い女」としての苦しみは、架空の恋人を介在させた、自作自演の「文通」だけでは、決して昇華されるものではなかった。そこで、妹は、自らが創作したプラトニックな「愛」の物語から逸脱し、虚構において恋人と自分との逢瀬を実現させた。しかし、所詮はそれも、虚構のなかの出来事に過ぎず、「あたしのからだを、しつかり抱いてもらひたかつた。」という妹の願いが現実に叶えられることはない。むしろ、自分自身の孤独や惨めさを、いっそう痛感する結果を招いた。

同時に、実際は、「今までいちども、恋人どころか、よその男のかたと話してみたこともなかつた」妹は、物語の

作者・執筆者としての限界にも突き当たることとなる。なぜなら、虚構の世界において、他愛ない恋文をやりとりする「文通」という枠組みのなかで成立していた妹たちの恋愛は、それが「心だけのもの」を超えてしまった時点で、変質を余儀なくされるためである。想像力だけを頼りに、物語を書き続けたとしても、それは、「ひとりで、自分あての手紙なんか書いてるなんて、汚い。あさましい。ばかだ。」という自己嫌悪を喚起させるものであり、それにも勝る強い執筆意欲を維持することは、妹にとって、もはや困難であったと考えられる。

したがって、虚構の恋の限界と、ロマンスの作者としての妹の限界という二重の意味で、妹の物語は終局を迎えざるを得なかった。

妹は、彼女が結核であることを知った恋人が、「もうお互ひ忘れてしまいませう」と別れを告げるという、ある意味では、きわめて現実的な結末をもって物語に幕を下ろした。というのも、妹は、架空の恋人から自分宛ての恋文を書いていたため、虚構の恋を終わらせるとすれば、恋人が自分に別れを告げるという体裁を取るのが自然であった。そして、同時にそれは、病魔によって恋人と引き裂かれる悲劇のヒロインとして、虚構における自分自身を描くものでもあった。

しかし、そうした事情を全く知らずに手紙を読んだ「私」は、妹が病気を理由に恋人に「捨て」られたという「残酷」な事実に直面する。そこで、「私」は、妹の恋の悲惨な結末を変容させるべく、「M・T」を装って手紙を書くことで、自分なりの新たな物語を構築した。つまり、妹の創作した物語が、作者である妹自身の意図とは異なった形で、姉に受容され、その上に、今度は姉によって新たな物語が創作された、という構図を読み取ることができる。

「私」が妹のために創り上げた虚構は、「M・T」が妹に別れを告げたのは、病に苦しむ彼女を救うことができない自分の「無力」さが嫌になったためであり、妹への「愛」は変わっていないというものであった。ここで注目したい

のは、「私」が「M・T」を装って書いた手紙において、「言葉」によって「愛」を表現することが繰り返し述べられている点である。

僕は、貧しく、無能であります。あなたひとりを、どうしてあげることもできないのです。ただ言葉で、その言葉には、みぢんも嘘が無いのでありますが、ただ言葉で、あなたへの愛の証明をするよりほかには、何ひとつできぬ僕自身の無力が、いやになつたのです。（中略）僕たち、さびしく無力なのだから、他になんにもできないのだから、せめて言葉だけでも、誠実こめてお贈りするのが、まことの、謙譲の美しい生きかたである、と僕はいまでは信じてゐます。（中略）僕は、もう逃げません。僕は、あなたを愛してゐます。毎日、毎日、歌をつくつてお送りします。それから、毎日、毎日、あなたのお庭の塀のそとで、口笛吹いて、お聞かせしませう。あしたの晩の六時には、さつそく口笛、軍艦マアチ吹いてあげます。僕の口笛は、うまいですよ。いまのところ、それだけが、僕の力で、わけなくできる奉仕です。

現実問題として、仮に「M・T」が実在の人物であったとしても、彼が姉妹の家を訪れ、病床の妹と面会することは困難であるため、「愛」を伝えるのに、手紙という手段が選ばれることは不自然ではない。同様に、「私」が彼を演じるにあたっても、妹に姿を見られてはならない以上、手紙を書いて送ることや、口笛を吹くことは、文字通り「私」の「力」でも可能な、数少ない「奉仕」であった。

だが、前章でも述べた通り、手紙を書いた時点での「私」は、妹の死期が迫ってきたことに加えて、妹が「きれいな少女」ではなかったことに衝撃を受け、「奇怪な空想」に苦しめられていた。「あのころは、私自身も、ほんとに、

少し、をかしかつたのでございます。」、「ただもう妹のことで一ぱいで、半気違ひの有様だつた」と語り手は、当時の自分の切迫した状態を振り返っている。

ゆえに、〈美談〉という枠組みで読めば、〈妹思いの姉〉であった「私」が、窮余の一策として書いた手紙として読めるものの、その内容は、「をかしかつた」自分が書いたものとして、語り手自身によって相対化されていることが分かる。そうした視点から眺めれば、「私」が書いた手紙は、美しい「愛」の「言葉」が綴られたものであると同時に、通俗的で、稚拙とさえ言えるものである。

性的な煩悶のなかで書かれたはずの手紙で、「言葉」が強調されていることに関して、大平剛氏[9]は、「心だけのもの」ではない恋愛を楽しんでいた妹への皮肉やアンチテーゼを読み取っている。そして、「私」が歌人である「M・T」を装って詠んだ「待ち待ちて　ことし咲きけり　桃の花　白と聞きつつ　花は紅なり」という和歌についても、大平氏は、「純潔」の「白」ではなく、「成熟」や「情熱」を表す「紅」であった妹への皮肉が込められたものとして解釈している。

大平氏の見解に、論者も賛同したいが、同時に、「私」が妹のために「M・T」の身体を提供することはできない以上、「言葉」による「愛」が強調されるのは、必然的なものであったと言える。さらに、妹が恋人に見捨てられたまま死を迎えることや、それでもなお妹に嫉妬してしまい、「奇怪な空想」に悩まされる自分という、忌まわしい現実から目を背け、自らが創り出したプラトニックな恋愛という虚構へと逃避する「私」を読み取ることができる。

よって、前章でも取り上げた、妹に「これ、姉さんが書いたのね」と看破された際の、「私」の激しい羞恥の背景には、「心だけのもの」ではない恋を知った妹に、嫉妬や羨望を抱いてしまったことに加えて、自分が書いた手紙に対する「私」の慚愧の念も関わっていると考えられる。つまり、自らが苦しみから逃れたいがために、拙い虚構を用

いて妹の恋の結末を歪め、さらに、自分は妹に精一杯の「奉仕」をしたのだという自己満足までも得ようとしていた自分の浅ましさに気付いたのではないか。

だとすれば、「私」の手紙は、妹への「奉仕」にとどまらず、様々な意味が内在するものである。そこに「私」の現実逃避を読み取ると、「僕は、もう逃げません。僕は、あなたを愛してゐます。」といった、妹の病という厳しい現実と対峙する宣言は、皮肉にも反転し、空虚に響かざるを得ない。また、物語の終盤において、手紙を書いたのは自分であるという妹の告白は、「およそ三十通ほど」の手紙の持つ意味合いを反転させ、妹が人知れず抱えていた苦しみが顕在化することとなる。姉妹の手紙は、いずれも、他者への「愛」を伝えるはずの「言葉」が、本来の意味や機能を失い、自らの淋しさや苦しみを慰めるために空費されるという点で共通しているようにも見える。

だが、ただ空費されるはずであった妹の「言葉」は、姉によって読まれ、さらに新たな「言葉」が紡がれたことで、その意味が大きく変容した。姉を様々に悩ませた妹の手紙は、それらが全て虚構であったことにより、「あたしは、ほんたうに男のかたと、大胆に遊べば、よかつた。あたしのからだを、しつかり抱いてもらひたかつた。」という妹の悔恨を姉に伝える。そして、同じく「若い女としての口には言へぬ苦しみ」を抱えていた姉は、妹の思いを受け止めて、「そつと妹を抱いてあげ」、姉妹は、虚構のエクリチュールを通して、同じ苦しみを分かち合うことが可能となった。

その上で、庭の葉桜の奥から「不思議なマアチ」が聞こえてくる。姉は、自らが「M・T」を装って吹くつもりであった「軍艦マアチ」の口笛が、別の何者かによって吹かれたことに戦慄するが、妹は、「M・T」が虚構を抜け出し、自分への「愛の証明」に口笛を吹いてくれたかのように受けとめたと考えられる。実際には、約束通り「晩の六時」に「軍艦マアチ」が聞こえてきたことは、偶然の産物に過ぎなかったとしても、妹にとっては、架空の恋人

「M・T」を、実体を持つ存在として感知することができた、最初で最後の一瞬であった。そうした文脈のなかで、「不思議なマアチ」は、妹にとって一つの救いとなりえた。そして、「それから三日目」に、妹が静かに息を引き取ったことで、「私」は、口笛を、妹を苦しみから救済した「神さまのお恵み」であったと解釈する。そう信じることで、「私」は、早すぎる妹の死を受け容れることができた。

このように、「不思議なマアチ」という〈音〉がもたらされたことで、虚構のエクリチュールにおける「私」の「言葉」は現実のものとなる。それは、「姉さん、読んでごらんなさい。」と妹に促された「私」が、「声立てて」、自らの〈声〉で手紙を音読した事とも呼応したものであった。

花崎育代氏[10]は、妹が恋文を書いた動機として、〈声〉によるコミュニケーションだけでなく、〈書くこと〉による〈文字〉のコミュニケーションを姉と行いたいという妹の希求を挙げているが、さらに、本作品においては、〈文字〉によって書かれた内容が、〈声〉に出して読まれることで現実化するという点も看過できない。

四、反転する〈美談〉―「言葉」の宿命

「葉桜と魔笛」における老夫人の物語は、語りという人間の〈声〉によって形成されたものであるが、姉妹の手紙というエクリチュールに着目すると、手紙を書く行為の意味合いや、そこに綴られた「言葉」の意味が反転していくという物語の構造が明らかになる。

姉妹の手紙は、様々な揺らぎを内包した〈美談〉の、根幹をなすものである。同時に、それらが反転し、たとえば姉の手紙が、妹への皮肉に過ぎないものであったとすれば、〈美談〉そのものを反転させる可能性を孕んでいる。だ

が、たとえ〈美談〉が覆されたとしても、二人がそれぞれ抱えていた苦しみは偽りのないものである。それらは、虚構のエクリチュールを通して初めて顕在化し、姉妹で共有し合うことが可能となった。

「僕たち、さびしく無力なのだから、他になんにもできないのだから、せめて言葉だけでも、誠実こめてお贈りするのが、まことの、謙譲の美しい生きかたである、と僕はいまでは信じてゐます。」[11]という姉が綴った言葉は、不確かで容易に反転しうる「言葉」の宿命に抗い、最後の希望を「言葉」に託そうとする人間の姿を想起させるものである。

［注］

（1）井原あや「姉が編み上げたロマン―太宰治『葉桜と魔笛』を読む―」（『相模国文』第三四号、二〇〇七年三月、八一～九三頁）
（2）木村小夜「太宰治『葉桜と魔笛』論」（『叙説』第一七号、一九九〇年一〇月、五五～七二頁）
（3）櫻田俊子「太宰治『葉桜と魔笛』論―自己充足としての創作と父への郷愁の物語」（『郷土作家研究』第三五号、二〇一二年三月、六～一五頁）
（4）花﨑育代「『葉桜と魔笛』論―ロマネスクの外／追想の家族―」（『太宰治研究』第四輯、和泉書院、一九九七年七月、一四七～一六〇頁）
（5）木村小夜氏（前掲、注2）は、手紙を焼くだけであれば、姉の行動は「独善」であるが、「そこでとどまることが出来なかった」姉は、「妹の傷心を救い同時に自分の悩ましさを慰めるために」偽の恋文を書いた、としている。
（6）前掲、注1に同じ。
（7）木村小夜「『葉桜と魔笛』と尾崎一雄『ささやかな事件』」（『太宰治研究』第二一輯、和泉書院、二〇一三年六月、一～一〇頁）
（8）前掲、注2に同じ。

（9）大平剛「太宰治『葉桜と魔笛』論」（『帯広大谷短期大学紀要』第四四号、二〇〇七年三月、一～一〇頁）

（10）前掲、注4に同じ。

（11）神谷忠孝氏は、この箇所に着目し、「妹は自分を慰めるために言葉を利用したが、姉は言葉を信頼して懸命に書いたことが奇蹟につながったのである。〈神さまは、在る〉というとき、この「神」には言葉の力への作者の信頼があった。」と述べている。（神谷忠孝・安藤宏 編『太宰治全作品研究事典』勉誠社、一九九五年一一月、二二八頁）

※「葉桜と魔笛」の引用は、『太宰治全集　第三巻』（筑摩書房、一九九八年六月）に拠る。漢字は適宜通行の字体に改め、ルビは省略した。また、傍線は全て論者の付したものである。

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

A Discussion of Osamu Dazai's *Hazakura to Mateki*
—A "touching tale" reversed ; Sisters' *écriture*—

Yorina Kawanabe

Hazakura to Mateki（1939）is a work by Osamu Dazai, featuring an elderly woman's reminiscences delivered in the form of a monologue. This monologue forms a "touching tale," but at the same time, includes an instability that could ruin the touching tale from within.

In addition, if we focus on the matter of *écriture*, the fictional love letters that two sisters write in the story, we can clarify the structure of the story, in which the meanings of the letters will be reversed and the sisters' distress will come out. In this sense, the tale told by the elderly woman can be interpreted as an allegory on love and words.

The letters symbolize what we can call the "fate of words," for instance their uncertainty or untruthfulness. However, inane as the content of the letters might be when they are considered as documents or a written record, the act of writing the letters, which encapsulated the sisters' earnest feelings, was far from meaningless. The sisters can share their distress by the letters for the first time. The elder sister wrote in her letter, "I now believe that because we are lonely and powerless and we cannot do anything else, it is an honest, humble, and beautiful way to live to at least send words to you in all sincerity." This message symbolizes the attitude of a human being who tries to pin his or her last hope on words in defiance of the "fate of words."